

資 料

文献の動向から見た育児不安の時代的変遷

上野 恵子* 穴田 和子** 浅生 慶子***
内藤 圭**** 竹中 真輝****

〈要 旨〉

少子化・核家族化など子どもを取り巻く環境は時代とともに変化し、人間関係の希薄化・地域社会からの孤独など育児に対する不安を生みだしてきた。

本研究では、育児不安に関する文献の動向と時代背景について分析することを目的に、「育児不安」をキーワードに検索した82文献を対象に年代別に分類し、研究の動向と時代背景の関連性を検討した。

その結果、①育児不安に対する明確な定義はなかった。②1950年代から現在へと時代の変遷とともに育児不安の本質や要因となるものが具体化していた。③育児環境の変化が取り上げられ始めたのは1960年代であった。「育児不安」の問題が顕在化し社会問題として注目され始めたのは、高度経済成長期以降の1970年代後半であった。④現代の育児不安に必要な支援は、父親の育児参加や地域ぐるみの子育て支援であることが明確になった。

キーワード：育児不安、研究の動向、時代背景

I. はじめに

近年、少子化・核家族化が進み、子どもを取り巻く環境の変化や遊び仲間の減少などにより、戸外での活動体験や人と交わる経験が不足して育つ子どもが増えている。また、育児経験のないまま親となり、育児支援者の不在や近隣社会からの孤立、人間関係の希薄化は、子育て不安やストレスを生じさせる要因にもなっている。最近では、積極的に健やか親子21など育児支援対策がとられているが、現実的には十分な効果が得られていない。

どの時代にあっても育児に伴う不安や疑問は誰にもつきまとうものであるが、現代社会においてますますクローズアップされ、育児不安に伴う様々な事件や症例が多く報告されている。

そこで、育児不安がいつ頃より問題化してきたのか疑問を抱き文献を検索したところ、1960年代から現代にかけて様々な育児不安に関する研究がなされていた。しかし、育児不安についての定義は研究者によって微妙な違いがあり、時代によっても使用されている用語（単語）にも違いがあることを見出した。また、文献の内容から育児不安の変遷について研究したもの

は見当たらなかった。そこで私たちは、育児不安の時代的変遷について文献の動向と時代背景から検討したのでここに報告する。

II. 研究目的

1950年代後半から現代までの育児不安に関する研究を概観し、育児不安の変遷を時代背景に着目し分析する。

III. 研究方法

1) 研究期間

平成20年8月～平成21年3月

2) 研究対象

医学中央雑誌web (ver.4) をデータベースに、「育児不安」をキーワードとして原著論文に分類された文献を検索した。また、それによって得られた文献に使用されていた文献をさらに収集した82件を分析の対象

* 西南女学院大学助産別科 講師
** 西南女学院大学助産別科 助手

*** 西南女学院大学助産別科 教授
**** 西南女学院大学助産別科 第1期生

とした。

3) 分析方法

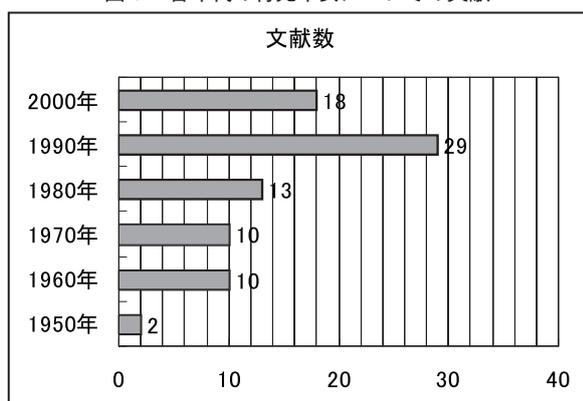
研究対象とした文献を年代別に分類し、研究の動向を検討した。次に、それらの結果と時代背景の関連性について検討した。

IV. 結果

1) 育児不安に関する研究の動向

今回、収集した文献数は図1の通りである。60年代より育児相談の内容に関する研究が見られる。その後、“育児不安”という用語が論文の中で最初に用いられたのは、1976年の高橋種昭と中一郎による「母性の精神衛生に関する研究—育児不安を中心として—」であると庄司は述べている¹⁾。その頃より、育児不安に関する文献が多く報告されており、約10年毎に動向に変化が見られた。

図1 各年代の育児不安についての文献



2) 各年代の研究内容の特徴

(1) 1960年代

育児指導の現状として、田中²⁾は「育児指導に当って見て、我国の育児知識は意外に伸びておらず、育児知識の進歩が遅れているとあり、今後、我國民を肉体的にも精神的にももっと優秀にするには予防医学の性質を持つ、育児指導を完全にするのが最も効果があると信ずる」と述べている。また、中野³⁾は「戦後数十年の間に育児に関する一般の関心が高くなったが、乳児を持つ母親の知識はまだ不十分なことが多く、今後も育児相談への来院者は増加をみる現状である」と述べている。その後、居村ら⁴⁾は「ある県の施策に

より1966年から“不幸な子供の生まれない運動”が打ち出され、保健婦業務の中でも妊婦に対する働きかけが多くなってきていること、また、それに伴いかなり多くの妊婦が、妊娠に関連した不安をはじめとする種々の不安を持っていること」を明らかにしている。

1960年代の育児指導に対する考え方は、子どもを個人的な対象として捉えているのではなく、地域・国家単位で捉えていることがわかる。優秀な子どもに育てるため、予防的な観点から育児指導の必要性を訴えている。

育児相談の内容は、永野⁵⁾は、健康相談63%（育児指導、ツベルクリンなど）、栄養相談19.5%（離乳相談、調乳のやり方、混合栄養など）、疾病相談16.8%（湿疹、感冒など）であったと報告し、中野の研究³⁾では、発育、健康状態（病気・予防注射）、栄養（離乳食）、精神発達に関するものであったことが述べられている。またこの年代より、育児相談と育児書との関係について言及している文献が見られるようになる。加藤⁶⁾は「明治の初頭から第二次世界大戦の終わりまで育児書の出版が増加しているが、1955年頃より育児書の出版数が劇的に増加した」と述べている。羽室⁷⁾は、「東販の調べによると、1969年には日本には68種類の育児書が発行されていた」と述べている。また、育児知識を求めたものの割合を調査したところ、育児書55～60%、新聞・雑誌・テレビなどのマスコミ30～39%、病院や保健所20～22%という結果であった。医者や保健婦に相談するため育児書は必要ないと考えている者は45～53%であり、「育児相談と育児書は利用する側がそれぞれの特徴を認識して活用されれば良いのだが、片方で間に合う、片方で十分という考えが主流であった」ということを指摘していた。

(2) 1970年代

1960年代同様、育児に関連した文献には、「母親の養育態度に関する研究」、「母親の育児態度に関する調査」、「母子保健に関する母親の認識」など、育児の現状（家族形態）を調査したものや母親の養育態度、母親の知識・認識について研究したものが多く、1970年代前半は育児不安に関する文献は見当たらなかった。

しかし、1970年代後半になると、高橋ら⁸⁾により「育児不安」という言葉が使用され、母親の育児態度に影響を与えると思われるもの、母親の育児に関する不安を抱かせる要因（育児不安の要因）を挙げ、母親への影響を調査していた。また、伊藤による研究⁹⁾では育児ノイローゼの母親に対する事例研究が行われてい

る。

また、高野ら¹⁰⁾は、母親の学歴別に育児書の保持状況を調査している。大学卒業者が92.5%と最も育児書を持っていることが明らかとなり、中学卒業者が52.3%と最も少ない結果となった。また、約90%の母親が育児書を有益であったと回答したことが明らかにされていた。また、高野ら¹¹⁾は、働いている母親は職業を持っているために保健所を利用することができず、情報を得ることができないものもいることを指摘していた。

(3) 1980年代

1980年においては、鈴木ら¹²⁾の研究をはじめ、母親の学歴と育児不安との関連性に関して研究されている文献が多く見られた。これらの研究の多くは、母親の学歴が高いほど育児不安を抱きやすいという結果が示されている。

またこの時代、育児書・雑誌・テレビなど育児に関する情報が豊富になってきたといえる。鈴木ら¹²⁾の研究では、全体として84.0%が育児書を所持しているということが明らかとなり、また、高学歴になるほど育児書の所持率が高くなっていった。多くの母親が、何か気になることがあると育児書を見て解決を図ろうとしている傾向にあり、また、約30%に子どもの発育の良否を育児書によって決めている傾向があることも述べられていた。

牧野^{13) 14)}は、育児不安について一時的あるいは瞬間的に生ずる疑問や心配ではなく、持続し蓄積された不安の状態であるとしている。また、育児不安の程度に影響を与える因子として、夫との関係や母親の社会的関係の広さに規定されていると述べている。

1980年代後半になると、池亀ら¹⁵⁾は、「標準」という軸から育児が正しいかどうかを判断し、その標準の枠が狭くなってきていると述べている傾向にあると述べている。また、育児不安の関連因子に「父親」という単語が見られるようになる。

加藤ら¹⁶⁾の調査によると、育児に父親の参加を希望する母親の割合が高かった。また、父親へ不満がある割合は、育児に不安を抱えていない母親に比べて、不安を抱えている母親の方が約1.5倍高かった。この他の研究においても、育児不安が増減する要因の1つに父親の存在が挙げられているものが多い。

(4) 1990年代

① 育児不安の明確化

川井らは、育児不安の概念が曖昧で多義的で明確化されておらず、的確な対応・援助は成し得ないという考えに基づき1994年から研究を始めている。

最初の研究¹⁷⁾では、育児不安の因子を「不安・抑うつ感因子」と「育児困難感因子」の2つに分類している。

不安・抑うつ感因子は「母親自身の不安、抑うつ傾向が育児の中で増幅するもの」であり、育児困難感因子は「母親として不適格と感じる、子どものことでイライラする、育児に対する負担感を訴えるもの」であり、この育児困難感が育児不安の本態に近いと述べている。

その後の川井らの研究¹⁸⁾により、この育児困難感を構成する項目として、①子どもをうまく育てているとは思えない、②子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある、③子どものことが煩わしくて、イライラする、④叱りすぎるなど、子どもを虐待しているのではないかと思うことがある、という4つを抽出した。

これらは先行研究¹⁷⁾の育児困難感の因子と一致していることから「中核的育児困難感」と命名し、育児不安の本態であることを示唆した。また、保健指導、育児相談等臨床的対応への手掛かりを示している。

翌年には、育児困難感の心性をより明確にし、育児困難感を2つのタイプに分類することにより、この2つのタイプの基本的なシエマ構成は、ほぼ同一であることが明らかになった¹⁹⁾。タイプⅠは、子どもへのネガティブな感情、家庭機能の問題が主に関連し、タイプⅡは、家庭機能と母親の心の不健康が主要関連因子であったことから、育児困難感の低減ないし解消に向けての相談に際しては、家庭機能と母親の心の健康の相互性を重視し、十分に視野に入れることが重要であると述べている。

これらの研究結果を基に、多くの研究者が育児不安の分類についての研究を行っている。

② 育児不安と父親・夫婦関係

1994年から行われている川井らの研究¹⁷⁾により、子どもが3歳以上の時、夫の育児・家事への参加率と育児困難感とは有意に関連しているということが明らかとなった。また、「夫と子どものことについて話す機会がない」「夫と気持ちが通じてない」などの夫婦間の問題も育児困難感の高い母親に有意であることが

明らかにされている。このことより、相談は父親、母親、子どもの3者の関係を視野に入れて考える必要性があることを示唆している。また、坂間ら¹⁸⁾の研究では、育児期の家族をサポートしている専門家が、何らかの援助・介入が必要と考えている心理的側面での育児上の問題の分析より、「育児不安」「児への苛立ち」「負担・犠牲感」「不満足・不全感」の4つのサブスケールで構成される「育児ストレイン」という概念を用いている。夫からのサポート感は、育児ストレインの中でも負担・犠牲感および不満足・不全感を低める方向に大きく影響していることが示され、「育児をしている自分の努力を夫が認めてくれている、夫と一緒に育児をしている」という実感が重要であるということが述べられている。

③ 育児不安とライフコース、職業の有無

1990年代の研究では、調査対象を年齢・学歴・子育ての経験の有無に加え、「母親の就業の有無」に関して分類・分析している文献が増加してきた。

坂間ら²⁰⁾の研究において、パートタイムでは負担・犠牲感と不満足・不全感が有意に低く、フルタイムにおいても、不満足・不全感が有意に低かった。一方、専業主婦では、いずれのサブスケールにおいてもストレインが高い傾向にあった。1つの役割に徹底することからくるプレッシャー、子どもとの距離が近すぎることからくるプレッシャーを感じている可能性があることが示唆された。

1997年の経済企画庁の調査²¹⁾によると、第1子が就学前の女性のうち、子育ての自信がなくなることが「よくある」又は「時々ある」と答えた者の割合が、有職者で50%、専業主婦では70%にも達している。これらの傾向は、家に閉じこもって、終日子育てに専念する主婦は周囲の支援が受けられず、孤独感の中で子ども中心の生活を強いられ、自分の時間が持てないなどのストレスを溜め易い状況にある、ということが指摘されている。

④ 育児不安とアイデンティティ・母性性

アイデンティティとは、エリクソンによって青年期の心理・社会的課題として提唱された概念である。岡本²²⁾の研究では、育児期における女性のアイデンティティ様態を個としてのアイデンティティの達成度と母性意識の高さの2つの次元からとらえ、統合型、伝統的母親型、独立的母親型、未熟型の4タイプに分類している。

研究の結果、夫との肯定的な関係や家族に対する積極的関与は、個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティの統合を支えるものであることが示唆された。

母親となる女性が、育児の知識を得る機会も、乳幼児に接する機会も少ない状態で妊娠・出産・育児を迎えてしまう現状がある。これを踏まえ、北村ら²³⁾は「看護職者は母親の母性性を支え、育児の喜び、可能性を母親が取り戻せるような支援を心がけ、そのことが結果として児の成長につながるようなかわりを持つべきである」と述べている。佐藤²⁴⁾は、新たに母親になる女性を、子どもに対して優しくマザーリングする、マザーリング・ザ・マザーの必要性を唱えている。

⑤ 育児不安と情報源

1994年の川井ら¹⁷⁾の研究では、育児に関する情報源として利用されているのは、最も多いのが「近所の人や友人」(73.1%)、次いで「育児雑誌」(68.8%)、「自分の親・きょうだい」(64.2%)の順となっている(複数回答)。これらの中で、どの情報が役に立つかは、「近所の人や友人」(57.7%)「自分の親・きょうだい」(51.9%)「育児雑誌」(41.9%)となっており(複数回答)、利用する情報源の順番とほとんど変わらない。

また、山岡ら²⁵⁾の研究では、欲しい項目ごとに情報源を使い分けていることが示されている。文献の結果からは、相談機関に出かけてというよりも、身近なところ、手元にあるものから情報を得ている傾向にある。マスメディアからの間接的な情報よりも、友人や親・きょうだいからの直接的な情報の求めており、確かに、具体的な答えを人に求める傾向が示されている。

⑥ 育児不安の評価

1990年代の終わりから、これまでに明確になってきた育児不安の要因・背景を基に、具体的に育児不安を評価、測定する方法に関する研究が発表されている。この時期は、まだ質問紙やスケール等の作成に関するものが主で、スクリーニングを行う前段階の報告が多い。

(5) 2000年～現代

① 育児不安と育児環境

2000年代になると、文献の中には「今日の子育て不安・子育て支援を考える」「子育て期をより幸福に過ごすための母親の工夫とその効果」「前向き子育てプ

ログラム」というタイトルがあり、少子化にある今日の育児環境において、育児ストレスを抱えながら子育てをしている母親への支援に関する研究が多く行われている。

櫻谷²⁶⁾は、「今なお、『母親なら子どもをちゃんと育てるのは当たり前』という“母性愛神話”が根強く残るなかで、母親たちは1人で育児を背負い込み、『良い母』を演じようとしてかえって精神的に追いつめられてしまう。こうした揺れ動く母親たちの気持ちを共感的に受け止め、『理想の子育て』『理想の母』という呪縛から母親たちが自由になり、もっとのびやかな子育てができるように支援することが必要である」と述べている。また、「親としての自信が持てない人が半数おり、親になる以前に子どもの世話を体験した人は3割に過ぎず、子育てのイメージと現実とのギャップにとまどっている」と述べている。近隣からも孤立し、不慣れな子どもの世話を母親1人で担っている住宅保育の実態も浮き彫りとなり、地域における育児文化体験の伝承や受け渡しがなく、不安を抱える親たちが、教育やしつけを焦り過ぎて、子どもに過干渉になっていることも明らかにされていた。

清水ら²⁷⁾は、育児幸福感の効果そのものが子育て期をより幸福に過ごすことに通じていることから、母親の育児に伴う喜びなど肯定的な感情である『育児幸福感』を強化しながら、育児をより有意義な体験とし、母親自身が育児を通して自己価値を高め、親として、女性としての発達課題の達成に向けた支援を行うことが重要であるとした。しかし、子育て期をより幸福に過ごす事への困難な要因として、「複合化したストレスからくる疲れとイライラ」「あれもこれもと思う自分の性分」「人に任せられない自分がやるという気負い」があるということが明らかとなった。

② 育児適応

2000年以降になると、『育児適応』という用語が登場し、様々な文献で使用され始める。

田中ら²⁸⁾の研究では、育児適応に最も関連の強かった項目は、初産婦の場合、「あやすのがつらい」「育児が楽しい」「育児に慣れた」の順であり、経産婦の場合、「思うようにしてくれる人がいる」「赤ちゃんの空腹のサインに早く気づくことができる」「育児に慣れた」「夜間子育てを手伝ってくれる人がいる」の順であった。田中は「育児の経験を繰り返す事により次第にコツをつかむこと、赤ちゃんへの対応が早期にできることなどが重要で、これらは母親の自信や精神的な余裕、時

間的な余裕にも繋がり、育児生活を肯定的に受け止めることができる。その結果として、母親の育児適応が高まる」と述べている。

③ 育児不安と夫の育児支援

楠橋²⁹⁾は、「夫に対して母親が夫の支援に対する満足度や理解されていると感じることが育児不安に影響を与えることを伝えていくことで、母親が安心して地域で子育てをしていくことができる」と述べている。前述のとおり、田中ら²⁸⁾は夜間育児を支援してくれる人がいる場合、育児における心身の負担が軽減するため育児適応が高まることを明らかにしている。川井ら³⁰⁾も、「90年代から今に至るまでの研究を通して改めて父親・夫の問題がクローズアップされてきた」と述べている。櫻谷²⁶⁾は、夫の家事・育児参加に満足している人は3人に1人に過ぎず、夫婦で互いに支え合って子育てをすることができないことが母親たちの葛藤を強めていることを推察している。

④ 育児不安スクリーニング尺度

島田ら³¹⁾は、産褥期は母親役割を取得するだけの時期ではなく、生活の変化に適応していく移行の時期であるという考えに基づき、褥婦が自己の生活にどの程度の肯定的感情を抱いているかを知ることが、対象者理解に重要であると考えた。

“育児肯定感情”の構成要素は、「母親役割への自信、育児を中心に生活している自己に対する肯定的感情であり、新たな生活で生ずるストレスに対する認識や褥婦自身へのソーシャルサポートへの認識を含む」とし、育児を行っている生活に対する肯定的感情を測定する尺度として『産褥期育児生活肯定感尺度』を作成した。

川井ら³²⁾は、①母親の援助の必要性を判断する目安として利用する、②母親の抱える育児の問題点をより明確にし、母親とその家族の育児を支援するための指針を得ることによって、育児不安解消のための適切な相談をすすめていく、という目的で育児困難感のプロフィール評定質問紙『子ども総研式・育児支援質問紙ミレニアム版』を作成した。

⑤ 育児不安と低出生体重児

核家族化や少子化傾向に伴い、育児場面に遭遇したことのない母親が増加しており、母親の育児不安は顕在化している。このような社会環境下、低出生体重児をもつ母親の不安は測り知れない。

近年、低出生体重児の出生率は徐々に増加しており、

それに伴い、低出生体重児をもつ親に関するものが多く研究されるようになっていく。

吾郷ら³³⁾は、低出生体重児をもつ母親を対象とし、育児不安の程度と属性等との関連性、及び退院後の育児不安の内容について調査を行った結果、①児の基本属性と育児不安に関連性はなく、母親の年齢と育児不安については高い関連性あること、②保健師の家庭訪問は、育児不安と高い関連性あること、③低出生体重児をもつ母親の育児不安の内容は、栄養に関するものが最も多く、環境、トラブルなど多岐にわたること、を明らかにした。

渡部ら³⁴⁾は、極低出生体重児をもつ母親は、自責の念や抑うつ傾向にあり、両親や親戚からのサポート感が低いことが関連していることを明らかにした。また、800g未満の子どもは有疾患率が高く、母親の不安や悩みも特に強かった、という現状より、個別的支援や超低出生体重児のみのピアサポートを設けることの必要性を述べている。

(6) 育児不安の定義

育児不安とは、一般的には、育児に対する戸惑いや混乱、育児への負担感から生じる子どもに対する漠然とした不安や自信の喪失をもたらすことをいう。

1980年代より、育児不安に関する研究が盛んに行われており、研究者が述べた育児不安の定義を挙げると、牧野カツ子は、「子どもの現状や将来、あるいは、育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」¹³⁾ (1981年)、「無力感や疲労感あるいは育児意欲の低下などの生理現象を伴ってある期間持続している情緒の状態をいう」¹⁴⁾ (1982年)としており、櫻谷真理子は、「乳幼児を養育中の母親が育児に疲れたり、子どもの発育や子育て全般にわたる心配事が絶えず、心理的緊張が増大した状態」²⁶⁾ (2004年)としている。

しかし、育児不安の定義は、学術的な定義がなされている訳ではなく、あいまいな概念として多義的に用いられており、研究者によってかなり違いがある。

V. 考 察

1) 育児不安と時代背景

(1) 家族形態の変化

日本の人口動態は近代化、経済発展に伴い、多産多死から多産少死、さらに少産少死へと変化してきた

背景がある。

1950年前後の朝日新聞社調査により「人口過多」が指摘され、「都市は産児制限、郡部は海外移住」という対策がとられていることを明らかにしている。高度経済成長にともない地方から都市部へと移り住み、1950年代には「核家族化」という言葉が使用され始めた。

少産化が定着した1960年代は「二人っ子」や「二児制」という言葉が使用され、1964年の流行語は「鍵っ子」であり、1969年度児童家庭調査報告などからも、核家族化が急速に進行しているということが示されている。

1960年代は育児不安に関連した文献・研究は見当たらなかった。しかし、この時代から徐々に育児を取り巻く環境や人々の考え方に変化がみられ始め、家族形態に伴う育児の状態はいかなるものかという、現状把握のための保育実態や育児相談に関連した文献研究が多くなった。

1970年代は、高度経済成長が一段落し、オイルショックの影響もあって低成長時代へと変化する。「ニューファミリー」といわれる、都市部に移住した団塊世代が、比較的近い年齢層同士で結婚し核家族をつくったり、当時の子供を取り巻く状況は複雑化し、「登校拒否」や「暴走族」など現代に通じる様々な問題が起き始め、少年たちの一般市民への暴力事件やグループ同士の抗争事件が社会問題として取り上げられるようになった。

(2) 育児と母親

「子どもは三歳までは常時家庭において母親の手で育てないと、子どものその後の成長に悪影響を及ぼす」という“三歳児神話”は1960年代に我が国で広まり、欧米における母子研究などの影響を受け、“母性役割”が強調される中で、育児書などでも強調された。

1970年代は、子捨てや子殺しの問題が目立され、母性喪失や育児ノイローゼといった視点で論争がなされていた。1971年版厚生白書では育児ノイローゼの母親を“問題親”と指摘したように、「育児ノイローゼは母親個人に問題や原因がある」としていたり、1979年に出現した“母原病”でも「母親の育児下手が子どもに様々な病気を引き起こしている」とされ、ちょうどこの頃、スキンシップや母と子の結びつきの重要性が盛んに言われるようになった。多くの母親が、子どもや育児に対して「自分が悪いのだ」と自責の念に駆られ、自信が持てなくなってきた。

育児不安という現象が社会問題として注目され始め、高橋⁸⁾らによる論文の中で“育児不安”という言葉が最初に用いられた。その後、牧野^{13) 14)}らによる育児不安に関する研究が始まり、その要因についての分析がなされるようになるなど、様々な分野からの研究がなされるようになったといえる。

1969年の民間企業による「赤ちゃん110番」を皮切りに、公的機関が保育所保育を活用して行うもの、乳業メーカーや育児雑誌が提供するものなどその数を把握できないほどの相談機関が設立されてきたことから、1970年代から育児に不安を訴える母親が増えてきたのではないかと推察される。

(3) 受験戦争と育児

1970年代から1980年代にかけて、日本経済は黄金期を迎え、一般家庭においても夫の給与だけで生活できるようになり、専業主婦が一般化してきた。この結果、母親は子どもに時間とお金を費やすことができるようになる。

社会のエリート志向と団塊ジュニアの世代は、人口の多さゆえに受験競争が激しくなり、「受験戦争」と呼ばれるようになる。有名進学校に入学させたいと思ういわゆる“教育ママ”が出現するまでになった。このような社会情勢が70～80年代に育児不安と母親の学歴の関連性を調べた文献に見受けられたものと考えられる。

また、この時期に育児を行っているのは、「団塊の世代」の親たちであり、受験戦争の始まり頃で、大学・短大への進学率はそこまで高くなく、経済的に進学をあきらめざるをえない環境もあった時代である。自分に果たせなかった夢を子どもに託すようなかのように、塾の送り迎えなどが生活の一部となってきた傾向がみられた。

1980年の流行語に「買春」「校内暴力」があるが、受験勉強でストレスを感じた子ども、受験戦争についていけずに「落ちこぼれ」となってしまう子どもが暴力や性の快楽に走ってしまう現象が見られ社会問題化した時代である。

そのような状況下で、立派な子育てをしなくてはならないという母親の役割意識が高まり、育児に自信がもてなくなる母親が増加した。核家族化や近所付き合いの希薄化などで相談する相手が身近にいない現状から育児の知識を育児書に求め、育児のマニュアル化をみる傾向になり、育児不安・ノイローゼに関する研究が増加してきた要因になったと考える。

(4) 育児と家族

1980年代後半、育児不安の関連因子等が徐々に明らかになるにつれ、父親の存在が見えてきた。今まで、仕事一筋で育児にあまり参加しなかった父親と子との関係の希薄化が顕在化した。

1990年代に入ると、育児不安を引き起こす要因の1つに「育児の密室化」があげられ、育児不安の本質に迫る研究が増加している。

また、バブル崩壊後の経済の低迷により再び女性の社会進出が余儀なくされる状況となる。1990年代に母親の就業の有無や就業形態と育児不安との関連性を調べた文献が増加したこととの関係性が伺える。

核家族化が進む現代において、受験勉強中心の生活で、近所の同年代の子どもと遊ぶ機会が少なかったり、一人っ子や2～3人の兄弟で育ち小さい子どもとのふれあいが少ないままに成長した団塊ジュニア世代が育児期に突入しているといえる。2000年代に入り、国の施策としても「次世代育成支援推進法」や「男女共同参加プラン」が出され、『男性を含めた働き方の見直し』『子どもを育成するすべての家族を、社会全体で支援することの必要性』が説かれてきている。また、父親の育児に対する性別役割分業意識が変わりつつあるといえ、核家族で育児が行われていることが多い今日、その育児を主に行う母親の身近な支援者として、夫の役割が期待されており、父親の育児参加や育児支援に関する文献が発表され始めたものと考えられる。父親の育児への参加の必要性・重要性が見直され始めたといえる。

さらに1990年の「1.57ショック」といわれる合計特殊出生率の低下により、少子化現象が一般の注目を集めるようになった。政府が少子化問題を認識した1990年以降、「子育て支援」に関連する施策として、仕事と育児の両立支援のための保育施策を中心とした1994年の「エンゼルプラン」が策定された。しかし、その後も下がり続ける合計特殊出生率への緊急対応として、1997年の母子保健法の改正や1999年「少子化対策基本方針」が発表され2003年の少子化社会対策基本法の制定やその後も10年以上にわたり少子化社会対策を講じてきている。

(5) ハイリスク因子

出生率は低下しているが、低出生体重児の出生率は、1960年の7.1%に対して2006年では9.6%であり、2500g未満児の出生率は増加しているといえる。

2000年から2006年にかけて全国の出生数は119万人から109万人に減少したのに対し、未熟児養育医療の対象となる極低出生体重児は7,900人から8,373人に増加している。近年、不妊治療の普及と周産期医療の進歩により、超低出生体重児や合併症を持つ児も助かるようになってきている。このようなハイリスク児をもつ両親を支援するための研究や育児不安・虐待におけるハイリスク因子の把握のための研究が増え、具体的に効果的な育児支援対策や育児不安早期発見のための評価表やスケールの作成についても研究が深まってきている。

2) 現代における育児不安の本質

現代の母親が抱える育児不安の原点は、政府が実施した産児制限から始まった社会環境の変化である。それに伴い、核家族化や少子化傾向、都市化、女性の社会進出が進んだことにより、家族形態や家族のあり方が変化した。また、近年は情報化社会も進行し、情報の氾濫などによっても育児をとりまく環境が大きく変化したといえる。環境が変化しているのも関わらず、昔から続いている“三歳児神話”“母性愛神話”は今もなお、わが国に根付いており、川井ら³⁵⁾が述べた育児不安の本態である母親の育児困難感を生じさせていると考えられる。

また、現代の我が国は、高橋⁸⁾らが指摘しているように、その環境の変化は親、とりわけ母親の育児に対する考えを変化させ、「育児が辛い」「子どもをかわいく思えない」といった、近年、保健医療の専門家が何らかの援助・介入を必要と感じている心理的側面での“育児上の問題”をもつ親が増加してきているといえる。これらの原因の一つに、小さな乳幼児と接する機会が少なく、あやし方をはじめとする乳幼児との関わり方を知らないまま、自身が子育てを始めている現状が挙げられる。あやし方が分からず育児に自信が持てず、育児困難感を抱く結果につながっていると考えられ、さらに、近年「大人になりきれていない大人」モラトリアム人間が増えていることも、育児不安との関連性が伺える。

3) 効果的な育児支援の実践

数々の文献研究結果より、現代の我が国では核家族における父親の役割および夫の育児支援が重要であるということが示唆されている。2006年版労働経済白書³⁶⁾によると、男性の所定外労働時間は4年連続増加していることが明らかとなっている。よって、男性

の長時間労働は改善していないといえる。父親の育児参加を促すには、まず、父親の労働条件の整備が必要であり、父親も育児休業が確保できる労働環境を実現させていく必要がある。次に、女性の社会進出などの社会環境の変化にも関わらず依然として根づいている“母性愛神話”に対しては性別役割分業意識を払拭し、夫婦が協力して育児ができることが望まれる。石橋ら³⁷⁾の研究ではコミュニケーションが充実していると、父親・母親共に不安度は低くなるという結果が得られており、今後、地域での子育て支援として、“夫婦共に”継続して支援していくことが求められる。

専業主婦は働いている母親に比べて、「立派な子育てをしなければならない」という役割意識が強くなり、育児不安を抱きやすい。また、家に閉じこもりがちになってしまいがちである。“こんにちは赤ちゃん”事業など、母親に関わる機会を利用して、専業主婦にも積極的に外部との関わりがもてるように、働きかけることが必要である。

助産師として、夫婦が望む妊娠・出産・育児が行えるように、制度の情報提供や保健指導など対象者と地域と関連機関の橋渡しとなれるように、必要な情報を積極的に提供していくことが大切であると考えている。現在、「新新エンゼルプラン」や「少子化対策プラスワン」など様々な育児支援対策が行われている。しかし、地域の対象者が全ての内容を理解できているとはいえない現状があるのではないかと考える。支援を必要としている対象者が、適切な支援を受けることができるよう、地域全体で制度を周知させていくことが必要である。医療機関に勤める助産師は、1ヵ月健診以降、対象者に関わるということは難しい。しかし、育児を行う対象者に今後を見据えた情報を提供することにより、父親や母親が地域で子育てをするきっかけを作ることができると思う。

前述したように、育児や子どもを知らない大人が増えており、このことが、育児不安をもたらす要因ともなっている。子育て期に入る前に、少しでも乳幼児について興味を持ってもらえるよう、育児体験や乳幼児と接する機会を設けるなどの支援が必要であるといえる。将来の家庭生活の準備段階である思春期の段階から、結婚、妊娠、出産、育児などに備えた教育を推進することにより、助産師として命の大切さや育児の楽しさを伝えることができるのではないかと考える。

VI. まとめ

- ① 文献の動向を分析した結果、育児不安に関する明確な定義はされていなかった。
- ② 1950年代から現在へと時代の変遷とともに育児不安の本質や要因となるものが具体化してきている。
- ③ “育児環境”の変化が取り上げられ始めたのは、1960年代であった。“育児不安”の問題が顕在化し社会問題として注目され始めたのは、高度経済成長期以後の1970年代後半であった。
- ④ 現代の育児不安から必要とされる支援は、父親の育児参加や地域全体での子育て支援である。

VII. 研究の限界

本研究においては、今回引用した文献研究は、育児不安をキーワードとして文献検索を行ったが、育児に関する文献の一部にすぎないため、全体的な把握まではできていないと考えられる。今後、育児不安に関する先行文献及び育児支援など育児に関連した文献を含めて検討を重ねる必要があると考える。

VIII. 引用文献

- 1) 庄司 順一：育児不安，保健の科学，第42巻，第11号，870-874，2000
- 2) 田中 利雄：育児の基本理念を指導せよ，小児保健研究，第18巻，第2号，1959
- 3) 中野 宗一：私たちの病院における育児相談から，小児保健研究，第21巻，第2号，1962
- 4) 居村 茂徳：妊婦のもつ不安についての調査，保健婦雑誌，1968
- 5) 永野 貞：保健所における小児健康相談についての検討，小児保健研究，第21巻，第2号，1962
- 6) 加藤 翠：現代の育児習慣，小児保健研究，第37巻，第5号，1979
- 7) 羽室 俊子：育児相談と育児書，保健の科学，第13巻，第7号，1968
- 8) 高橋 種昭，他：母性の精神衛生に関する研究—育児不安を中心として—，日本総合愛育研究所紀要，1976
- 9) 伊藤 ひで子：育児ノイローゼの疑いがある母親への訪問指導（事例紹介），保健婦雑誌，第32巻，第12号，1976
- 10) 高野 陽，他：育児に関する調査～母の学歴との関係について～，小児保健研究，第29巻，第6号，1971
- 11) 高野 陽，他：育児に関する調査～母の年齢と育児態度について～，小児保健研究，第29巻，第5号，1971
- 12) 鈴木 淑子：3ヵ月児を持つ母親の育児不安について，小児保健研究，第38巻，第6号，1980
- 13) 牧野 カツコ：育児における不安について，家庭教育研究所紀要，第2号，1981
- 14) 牧野 カツコ：乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安>，家庭教育研究所紀要，第3号，1982
- 15) 池亀 卯女：母親たちの育児不安～地域のいみと専門家の責任，保健婦雑誌，第44巻，第8号1988
- 16) 加藤 忠明：育児不安，小児科診療，第50巻，1987
- 17) 川井 尚，他：育児不安に関する基礎的検討，日本子ども家庭総合研究所紀要，第30集，27-39，1994
- 18) 川井 尚，他：育児に関する臨床的研究Ⅱ，日本子ども家庭総合研究所紀要，第32集，29-47，1996
- 19) 川井 尚，他：育児に関する臨床的研究Ⅲ～育児困難感のアセスメント作成の試み～，日本子ども家庭総合研究所紀要，第33集，1997
- 20) 坂間 伊津美，他：育児ストレインの規定要因に関する研究，日本公衆誌，46巻，第4号，1995
- 21) 経済企画庁 国民生活局：平成9年度国民生活選好度調査，「専業主婦の母親に大きい育児不安」より，1997
- 22) 岡本 祐子：育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究，日本家政学会誌，第47巻，第9号，1996
- 23) 北村 朋子，他：健康診査時における養育者の育児不安の相違，母性看護，第27回，1996
- 24) 佐藤 紀子：育児不安と子育て，母子保健情報，第34巻，1996
- 25) 山岡 テイ：母親が求めている健診とは，小児内科，第26巻，1994
- 26) 櫻谷 真理子：今日の子育て不安・子育て支援を考える，立命館人間科学研究，第7号，2004
- 27) 清水 嘉子，他：子育て期をより幸福に過ごすた

- めの母親の工夫とその効果, 日本助産学会誌, 第21回, 第2号, 23-35, 2007
- 28) 田中 和子:産後1ヶ月の母親に関する育児適応に影響を与える要因の検討, 日本助産学会誌, 第21巻, 第2号, 71-74, 2007
- 29) 楠橋 絵美:乳幼児を持つ母親の育児不安と夫の育児支援, 新見公立短期大学地域看護学専攻科論文, 2007
- 30) 川井 尚, 他:子ども総研式・育児支援質問紙(ミレニアム版)の手引きの作成, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第37集, 159-173, 2001
- 31) 島田 真理恵, 他:産褥期育児生活肯定感尺度改訂に関する研究, 日本助産学会誌, 第16巻, 第2号, 36-45, 2003
- 32) 川井 尚, 他:子ども総研式・育児支援質問紙(試案)の臨床的有用性に関する研究, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第36集, 2000
- 33) 吾郷 美晴, 他:低出生体重児を持つ母親の育児不安に関する研究, 小児看護, 28回, 1997
- 34) 渡部 朋, 他:極低出生体重児出生の現状と支援に関する研究, 岩手県立大学看護学部紀要, 第8号, 19-28, 2006
- 35) 川井 尚ら:育児に関する臨床的研究, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第31集, 27-42, 1995
- 36) 厚生労働省編集:労働経済白書, 就業形態の多様化と労働者生活, 2006
- 37) 石橋 君子ら:夫婦の意識が相互の育児不安に及ぼす影響, 母性衛生, 第43巻, 第4号, 541-548, 2002
- 7) 和泉 成之:大学病院と育児室, 小児保健研究, 第20巻, 第1号, 1961
- 8) 松田 道雄:母とは何か, 小児保健研究, 第25巻, 第3号, 1966
- 9) 竹内 政夫, 深町 綾子:育児時間を中心とした農村の母親の生活時間について, 小児保健研究, 第21巻, 第1号, 1962
- 10) 佐野 良五郎, 他:母親の養育態度に関する研究~第一編:面接時における母親の表情・態度・言動表現の検討, 小児保健研究, 第33巻, 第4号, 1974,
- 11) 大月 澄江, 中桐 佐智子:母親の育児態度に関する調査~農山村における例~, 保健婦雑誌, 第32巻, 第12号, 1976
- 12) 伊藤 ひで子, 岩永 牟得:育児不安が強い母親に対する訪問援助活動~新任保健婦就職3カ月目の事例報告~, 保健婦雑誌, 第32巻, 第12号, 1976
- 13) 高野 陽, 他:母子保健に関する母親の認識, 小児保健研究, 第37巻, 第1号, 1978
- 14) 高野 陽, 他:家族形態と育児について, 小児保健研究, 第35巻, 第6号, 1978
- 15) 弓削 マリ子:乳幼児の育児環境と発達に関する縦断的研究~第2報, 小児保健研究, 第42巻, p 354-364, 1983
- 16) 澤田 啓司:育児と文化, 小児保健研究, 第42巻, 第5号, 1983
- 17) 古畑 京子:育児不安を持つ母親への支援, 公衆衛生情報, 1984
- 18) 増田 初江:育児不安を持つ母親とのかかわり, 公衆衛生情報, 1985
- 19) 佐々木 英子, 他:乳幼児を持つ母親の育児不安について, 小児保健研究, 第44巻, 第2号, 1985
- 20) 河合 雅雄:育児の生物学的基礎, 小児保健研究, 第45巻, 第2号, 1986
- 21) シンポジウム:現代の育児を考える, 小児保健研究, 第45巻, 第2号, 1986
- 22) 田戸 静:育児不安への対応, 周産期医学, 第17巻, 1987
- 23) 一広 伸子, 岩下 貴子:事例を通して考える母子援助:~孤独で育児不安を持っている母親へのかかわり~, 保健婦雑誌, 第44巻, 第8号, 1988
- 24) 島田 三恵子, 日暮 眞:育児不安, 小児科臨床, 1993
- 25) 石垣 和子, 他:手紙による母親の育児相談にみ

IX. 参考文献

- 1) 正高 信男:育児と日本人, 岩波書店, 1999
- 2) 柴崎 正行, 安斉 智子:歴史からみる日本の子育て, フレーベル館, 2005
- 3) 岡崎 祐士, 他 監修:こころの科学103, 2002
- 4) 木下 安子, 他:乳幼児の保育実態 その2~職業を持つ母親と家庭にいる母親の保育についての比較~, 保健婦雑誌, 第22巻, 1966
- 5) 永野 貞, 塚本 弘子:保健所に於ける小児健康相談についての検討(続報), 小児保健研究, 第17巻, 第3号, 1958
- 6) パネルディスカッション:最近の家庭の変貌と小児保健, 小児保健研究, 第24巻, 1965

- られる相談ニーズの傾向と保健婦等の相談担当者による保健指導のあり方について, 小児保健研究, 第53巻, 第5号, 677-681, 1994
- 26) 塚原 洋子: 育児不安への対応, 小児内科, 第25巻, 第9号, 1994
- 27) 永瀬 春美, 他: 電話相談から見た育児不安の実態～保健所に関連した相談の分析～, 小児保健研究, 第53巻, 第5号, 668-676, 1994
- 28) 深津 千賀子: 初産婦のもつ育児不安, 周産期医学, 第24巻, 第5号, 1994
- 29) 久保 千代子: 育児不安の解消～先輩ママによる母親学級, 保健婦雑誌, 第51巻, 第3号, 1995
- 30) 池田 正憲: 少子化時代における子育ての負担と喜びに関する母親の意識調査, 医学と生物学, 第133巻, 第1号, 1996
- 31) 南部 春生: 育児不安とその背景～育児の原点を考え、不安に応える, 日医雑誌, 第116巻, 1996
- 32) 南部 春生: 育児不安とチーム医療, 周産期医学, 第27巻, 第7号, 979-983, 1997
- 33) 横田 俊一郎: 育児不安とその対策, 日医雑誌, 第117巻, 第9号, 1997
- 34) 野村 幸子: 母親の育児不安にソーシャルサポートの与える影響, 小児看護, 第28回, 1997
- 35) 川井 尚, 他: 育児に関する臨床的研究Ⅲ～育児困難感のアセスメント作成の試み～, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第33集, 1997
- 36) 南部 春生: 地方の時代の小児保健～改めて子どもを熟知し、親の育児不足に応える乳幼児健診を～, 小児保健研究, 第56巻, 第6号, 716-722, 1997
- 37) 西見 寿博, 市川: 外来受診の母親への育児不安調査, 小児保健診療, 1997
- 38) 石井 陽子: 育児不安に対するかかわりとケアのポイント, 小児看護, 第20巻, 第7号, 1997
- 39) 山田, 他: 育児不安と小児救急医療, J. Natl. Inst. Public Health 第47巻, 第3号, 1998
- 40) 庄司 順一, 谷口 和加子: 育児不安～子育ての諸問題～, 保健の科学第40巻, 第4号, 1998
- 41) 川井 尚, 他: 育児に関する臨床的研究Ⅴ～育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成～, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第35集, 1999
- 42) 吉田 弘道: 育児不安の評価, 小児内科, 第31巻, 第5号, 760-763, 1999
- 43) 吉田 弘道, 他: 育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究～1・2ヵ月児の母親用試作モデルの検討～, 小児保健研究, 第58巻, 第6号, 697-704, 1999
- 44) 船橋 美奈子: 産後3ヶ月までの母親の育児不安, 日本助産学会誌, 第16巻, 第2号, 2003
- 45) 富岡 昌子: 育児支援に関する研究の動向と課題, 川崎市立看護短期大学紀要, 1-10, 2005
- 46) 三輪 聖子: 次世代育成支援における祖父母の役割について, 岐阜女子大学紀要, 第36号, 79-83, 2006
- 47) 阿部 範子: 母親の育児不安と夫の育児支援との関係, 母性看護, 第37回, 2006
- 48) 小林 弥生, 他: 産後1ヶ月健診までの初産婦と経産婦の退院指導項目における不安な気持の差と変化, 母性看護, 第37回, 2006
- 49) 宮本 純子: 乳幼児をもつ母親の育児不安についての研究, 心理臨床研究, 第25巻, 第3号, 346-345, 2007
- 50) 北村 亜希子: 早産による低出生体重児を持つ親の育児不安の実態, 母性衛生学会総会, 第48, 2007
- 51) 石津 博子, 他: 前向き子育てプログラム, 小児保健研究, 第67巻, 第3号, 2008
- 52) 金子 一史: 育児不安及び育児ストレスに関する最近の研究動向, 周産期医学, 第38巻, 第5号, 591-595, 2008

Changes in Parental Uneasiness for Child-Rearing with the Times of the Trend in Literatures

Keiko Ueno*, Kazuko Anada**, Keiko Asou***
Kei Naito****, Maki Takenaka****

<Abstract>

The child-rearing environment has changed over time, as the number of newborns has decreased and the number of nuclear families has increased. This trend has caused parental isolation from their local community, resulting in uneasiness in child rearing.

This study was for the purpose of analyzing the trends in literature on “parental uneasiness for child-rearing” and examining its references with the changes in the background over time. Eighty-two documents were obtained through a computer research using the keyword “uneasiness in childrearing.” They were chronologically divided into groups and analyzed for how they discuss the relevancies between the research theme and the background at the time.

The following results were obtained from the analysis: 1) No clear definition of “uneasiness for child-rearing” has yet been established. 2) During the 1950s, the essence and cause of the issue started to become clear. 3) It was not evident until during the 1960s when the changes in child-rearing environments became focused, and it was after the rapid economic growth in the late 1970s that anxiety for childrearing was recognized as a social problems. 4) Supports from fathers and local communities were found to be vital to dispel uneasiness about childrearing.

Keywords : parental uneasiness for child-rearing, background at the time, relevancies between research themes

* Instructor in the Division of Midwifery, Seinan Jo Gakuin University
** Assistant in the Division of Midwifery, Seinan Jo Gakuin University
*** Professor in the Division of Midwifery, Seinan Jo Gakuin University
**** Graduate of the Division of Midwifery, Seinan Jo Gakuin University